

令和五年四月二十五日第十八回閑手會チャネル令和の岩戸開き奉告祭

臨時祭開催に寄せて

大伴審一郎

「2020年から始まったコロナパンデミック(世界的大流行)は、人的・物的交流を極度に縮小させ、世界をグローバリズムからナショナリズムへと変容させました。

そして、世界各国が自国優先主義に傾く中、2022年2月に勃発したウクライナ戦争によって戦後の国際秩序は崩壊し、世界の平和は脅かされ続けています。

さらに、欧米を中心とする「民主主義国家」対中露を中心とする「権威主義国家」との間でブロック化が進み、新冷戦と言われる新たな対立構造が形成されつつあり、核戦争さえも想定される情勢となっています。

それに伴い、我が国を取り巻く情勢も厳しさを増しています。中国による台湾併合は現実味を帯び、相次ぐ北朝鮮による弾道ミサイル等の発射に加え、ロシアは北方領土を軍事要塞化しています。

このように、コロナパンデミックから始まった交流途絶と迫り来る戦争の脅威は一連のものであると言っても過言ではありません。

私たちは、現状を世界規模の混迷期であるとの認識に立ち、平和を希求する人々に対して日本の役割を明確に表明しなければならない時にあると考えます。

我が国は、世界に誇る有形無形の文化を全国津々浦々で保有していますが、それらは神道文化(日本哲学、精神文化)と深く結びつき、古より継承された日本の資産です。私たちは、この日本文化の底流に流れる神道文化こそが、対立や分断を乗り越えるための概念であると確信しています。

それ故、今後はあらゆる機会を通じて同概念を発信する必要があると考えています。

まず、本年5月に行われるG7広島サミットでは、唯一の被爆国である日本が「世界平和」へ向け、リーダーシップを発揮する意思を表明する一方、緊張緩和に向けた文化交流プラットフォームとしての役割を宣言する必要があります。

日本政府としては、G7議長国としてハードパワー(軍事・経済)による平和への取り組みをアピールするものと推察しますが、それと合わせてソフトパワー(神道文化)による平和を祭祀によって予祝しなければなりません。

白川学館は、かつての宮中祭祀を実践しています。その本義は高等国策にあります。つまり、審神者として国家あるいは世界をより良い方向へ導く祭祀を執り行うことをお役目としています。

このような祭祀、例えば今回のような平和に対する意識が集中するG7サミットの場を活用した、国家的・世界的な祭祀を執り行うことができるのは、唯一白川伯家神道のみと言ってもいいでしょう。

それが宮中祭祀の特性であり、宮中から民間へと活用を広げた故七澤賢治代表の意志でもあります。

宮中祭祀を実践する私たちは、本年開催される G7 サミットを活用し、現在の「混迷の時代」から「平和の時代」への幕開けを祭祀によって予祝し、2025 年に我が国を「文化立国」させるための行動を起こし、文化力によって世界貢献できる日本を創造しなければなりません。

この先日本は、これまでの拡大経済路線を踏襲するか、あるいは新たな価値を創造して立国するかという岐路に立ちます。

そのためにも、ぜひ今次の祭祀にご参加いただき、ともに争いのない平和な未来への扉を開きましょう！

・大伴審一郎 氏

国家情報機関に所属していたインテリジェンスの専門家

七澤賢治前代表の審神者により高等国策を立て、実行に移してきた圀手會国際委員会顧問